The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	語文　第12輯　編輯後記/投稿規定/奥付
Author(s)	
Citation	語文. 1954, 12
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68463
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

編輯後記

さやかに見えねど秋涼の気しのびより蟬声しきりである。読者諸氏の御健勝をおよろこび申上げる。

×

蟬は古往今来かはることなく鳴きつゞけてゐる。昔の行脚僧にその声をきしへられる必要がない。われわれは文明の利器をもち、天外の旅行さへ可能である。展望室に居ながらどんな山川でも眺められるのである。古人に何をきくことがあらうぞと、或人はいきまく。

なるほど古人は原子力も水爆も教へてはゐない。たゞ暑き日に面をこがし、山をこえ川を渉ってきく蟬の声の閑かさをうたってゐるだけである。彼等の言葉は簡単であり、非論理的でさへある。

しかしその感じ方の何とはげしく、深く、そして美しいことであらう。

われわれは知識はもった。しかし心の深さはもはや古人に及ばなくなったのではなからうか。われわれの心を深めるために、われわれのいはゞ生命の糧のために、古人にきかねばならぬのではなからうか。

国文学はかやうな願ひを中心にして生れた学問である。自然科学ならば、蛙の目玉であらうと猫の尻尾であらうとそれにくらひついて、しらべ上げれば、必ずそこに自然の真理がつかみ得るだろう。史学はこれにやゝ似てゐる。

国文学ではさうはいかない。昔の本だから何でも取上げてよいかといふに、そこに古人の深い心が必ずしも残ってゐないことがある。昔の人、すべて古人といふこともできぬ。また他人のすてた材料に思はぬ金玉の声のきかれる場合もある。

国文学者はさういふ意味で、対象を峻烈に吟味せねばならぬ。何が対象であるかも批判してかゝらねばならぬ。対象を発掘する方法も反省せねばならぬ。つねにきびしく価値を念頭におくべきである。

×

本号所載八篇の論文はさやうな意味で、相当反省の加はつた、よみごたえのあるものと思ふ。御清読を乞ふ。

（林）

◇投稿規定◇

○直接購読者は投稿することができる。
○原稿の内容は国語・国文学、国語教育に関するものであること。分量は四百字詰原稿用紙二十枚以内とする。
○原稿の送り先は「豊中市柴原、大阪大学文学部国文学研究室内、語文編輯委員」宛。
○原稿の採否は編輯委員に一任のこと。
○採用しなかつた原稿は返送料が添付してあれば返送に応ずる。
○一括購読者が投稿する際には代表者から紹介せられたい。

❖雑誌の寄贈・交換について

○雑誌の寄贈・交換は大阪府豊中市柴原大阪大学文学部国文学研究室宛に願いたい。

❖購読について

○購読希望者は発行所宛前金を添えて申込むこと。（送金は振替を利用されたい）

一部　五十円　送料　八円
一年分（四回分）　二百円（送料共）

○五冊以上一括購読の時は一割引の上送料は不要とする。

¥ 50

発行所　大阪市南区横堀7丁目19　文進堂　振替大阪112730番　電話船場1990
編輯者　大阪府豊中市柴原　大阪大学文学部国文学研究室　代表　小　島　吉　雄